

身の回りのドイツ語（１）ゼミ、テーマ、バイト

明治維新以降、日本は近代国家建設に際しドイツ帝国を手本にした。そのため明治憲法を始めとして、政治、社会、軍隊、学問、芸術、スポーツなど、様々な分野でドイツ文化の影響が残っている。その影響の結果、今日の日本語に残ったドイツ語からの外来語、いわゆるカタカナ語をこれから何回かに分けて見てみよう。

今回は大学生活で日常的に使われているゼミ、テーマ、バイトを取り上げます。ゼミはゼミナールの省略で、ドイツ語では Seminar です。これは「演習」や「研究室、学科」を意味します。英語でも seminar ですが、ゼミが英語ではなくドイツ語である証拠は「ゼ」と発音が濁るからです。ドイツ語では母音の前の s は[z]の音になります。英語であれば「セミナー」です。もっとも最近では日本語でセミナーという語も「講習会」といった意味で使われるようになりました。（ドイツ語では名詞は語頭を大文字で書きます。名詞はテキスト中で大事な情報を担っている部分なので、その部分を拾い読みしていけば速やかにテキストの内容を把握できるからです。日本語における漢字も同じ働きをしているように思われます。）

テーマはドイツ語で Thema です。ドイツ語の th は[t]の音を表します。これに対応する英語は theme ですが、テーマという語も発音からドイツ語であることがわかります。また、最後の音が「ム」ではなく「マ」であることもドイツ語に対応しています。

最後にバイトですが、これはアルバイトの省略で、ドイツ語では Arbeit です。発音も [ar bait]（アルバイト）です。注意して欲しいのは、外来語は原語と意味が違うことが多いということです。（先ほどの Seminar も seminar も原語では同じ意味なのに、日本語に入ると別々の語になり、意味を分担して表していますね。）アルバイトは日本語では「副業」という意味で使われますが、ドイツ語では具体的な仕事だけでなく、「労力を使うこと」という広い意味を持ちます。ですから、viel Arbeit「多くの労力」と言うと「苦労」という意味になります。また作業の結果としての「作品」や「論文」などを指すこともあります。ちなみに、日本語のバイトに当たるドイツ語は英語からの外来語 Job です。ドイツ語では j は[j]の音を表します（Japan は「ジャパン」ではなく「ヤーパン」と発音します）が、この語は英語のもとの発音を保持しています。

これは世界的な現象ですが、日本でも第2次世界大戦後は英米の政治的、経済的な力が強まった結果、英語の影響力が増大して、ドイツ語が使われる場面は徐々に減少しつつあります。しかし最近でもドイツの科学技術や文化が先進的な分野では、それを反映して、[幕張]メッセやクアハウスなど新しく使われだしたドイツ語もあります。意外と身近なところにドイツ語が使われていることがあります。次回からもう少し詳しく分野別に見ていきましょう。

身の回りのドイツ語 (2) カルテ、ウイルス、アレルギー

ドイツ文化の中で日本が大きな影響を受けた分野としてはまず医学をあげることができます。この分野には江戸時代からの隠れた伝統があります。江戸時代、日本は鎖国をしていましたが、ヨーロッパ諸国の中ではオランダだけが出入りを許されていました。そのため西洋医学は蘭学として入ってきました。メス、カンフル、モルヒネ、カタル、コレラ、リューマチなどはオランダ語からの外来語です。しかし、杉田玄白(1733-1817)が前野良沢らとともに 1774 年『解体新書』と題して翻訳刊行したオランダ語の解剖書は、もとはドイツ人クルムス(Johann Adam Kulmus 1689-1745)の著書をオランダ語に翻訳したものです。また、幕末の 1823 年に来日し、長崎の郊外に鳴滝塾を開いて日本人に医術を伝えたシーボルト(Philipp Franz von Siebold 1796-1866)はオランダ商館付きの医師として来日したのですが、実は南ドイツのヴュルツブルク生まれのドイツ人です。ちなみに、彼と日本人女性との間に生まれた娘、楠本稲は長じて女医となりました。

明治時代に入ると、プロイセン主導のもとフランスとの戦争に勝って 1871 年に成立したドイツ帝国の影響が強まります。森鷗外(1862-1922)が衛生学研究のため、文部省から派遣されてドイツに留学したことは有名ですが、日本の帝国大学の医学部にもドイツ人医学者が招聘され、ドイツ医学が主流になります。中でも東京帝国大学に招聘されたベルツ(Erwin von Balz 1849-1913)やスクリバ(Julius Karl Scriba 1848-1905)は多くの日本人医学者を育てました。そのような伝統の中から私たちがよく知っている著名な人としては、作家としても活躍した木下木太郎(1885-1945)、斎藤茂吉(1882-1953)などの人たちが出ました。

ではそのような歴史的背景を踏まえて、ドイツ語から日本語に入ってきた医学用語を見てください。まずカルテですが、ドイツ語は Karte です。これはポルトガル語から日本語になったカルタや英語の card と同じ語で、「カルタ」、「カード」、「葉書」、「切符」などカード型の用紙一般を指します。しかし、日本語のカルテは「患者の病歴を記した用紙」という狭い意味で使われています。

さまざまな病気の原因となるウイルスもドイツ語で Virus と書き、[vi:rUs] (ヴィールス)と発音します。日本語には [vi] の音はありませんから、これを「うい」で表したものだと思われれます。英語ならヴァイラスとなるはずですが、最近ではウイルスはコンピュータウイルスとしてもよく目にする単語です。

アレルギーはドイツ語では Allergie です。gi の綴りがギーと発音され、ジーでないのは英語からでない証拠です。ちなみに、エネルギー(Energie)もドイツ語ですが、英語であればエナジーですね。アレルギーは私たち現代人にとっても食物に対するアレルギーだけでなく、花粉症などもアレルギー性鼻炎ですから、馴染み深い言葉です。

次回も引き続きドイツ語から入った医学用語で、今日でもなお私たちの日常生活で頻繁に使われる単語を見ていきましょう。

身の回りのドイツ語 (3) ノイローゼ、ヒステリー、ワクチン

言語はひとつのシステムです。また、言語間の違いはそのシステムの構成が異なるという点にあります。日本語であれば日本が置かれた自然的、歴史的、文化的状況などによって独自のシステムを発達させていますが、システムそのもの間には優劣はありません。

しかし、明治時代に日本人はヨーロッパの学術、文化を取り入れようとしてたいへん苦労したので、森有礼のように、日本語は不完全な言語であり、国語を英語にしようとして提唱した人もいました。確かに、言語は理論的にはシステムとして同等ですが、現実には人間が生きていくための道具という側面もありますから、自分たちの目的にかなった言語の方がより好ましいという点で言語の価値付け、序列化が行われます。明治時代の人たちにとっては文化的先進国であるドイツなどの言語が価値あるものであったわけです。

このようなことはいつの時代、どこの国にもあります。ヨーロッパでは中世以来近世に至るまでギリシア語、そしてそれを受け継いだラテン語が学術や文化の言語でした。教会での説教、官庁等の公的文書、大学の講義などはラテン語でした。日本でも古代からずっと学術、文化の言語はその先進国である中国から取り入れた漢語、漢文でしたし、明治時代まで公式の文書は漢文で書かれていました。

19世紀後半から20世紀前半はドイツが世界の学術、文化をリードしていましたが、中世以来の伝統によって学術用語はギリシア語、ラテン語を利用していました。ですから、前回のウイルス、アレルギーもそうですが、オブラート、カプセル、ギプス、ヨード、ワクチン、ヘルペス、ノイローゼ、ヒステリー、ホルモン、アドレナリンなどの語は日本語へはドイツ語から入って来たのですが、そのドイツではこれらの語はみなギリシア語、ラテン語による造語でした。これは明治時代の先人がヨーロッパの学術語を取り入れるのに文化的ステータスの高い漢語によって表そうとしたのと似ています。

例えばノイローゼですが、ノイロは「腱、神経」、オーゼは「状態、病気」を意味するギリシア語から作られています。ヒステリーは「子宮」を意味するギリシア語から来ていますが、これはヒステリーは子宮の異常によって起こると考えられていたからです。また、ワクチンはラテン語の「牝牛」を意味するラテン語に由来しますが、これはワクチンは牛の天然痘をヒントにワクチンの一つである天然痘ワクチンが作られたからです。

ドイツ医学の影響は一般化していて、日本の医師は第2次世界大戦後もカルテをドイツ語で書いていました。ドイツ語は患者にはわからない隠語として使われていたわけですが、そのようなものにクランケとオペがあります。クランケは本来 krank「病気の」という形容詞を「病気の」という意味の名詞に使っていますが、ドイツ語では患者が男性なのか、女性なのか、1人か複数か、主語か目的語かによって形容詞の語尾も変わってきます。ですが、そのような文法的な区別のない日本語ではクランケという形しかありません。オペは Operation「手術」の省略です。Operation は英語の operation と同じで、他にも「操作」、「作戦」、「演算」などの意味がありますが、日本語のオペは「手術」に限定されていません。

身の回りのドイツ語 (4) ウラン、コラーゲン、ワセリン

前回ドイツでは中世以来の伝統から多くの医学用語がギリシア語やラテン語を使って作られていることを見ました。しかし、これは医学用語に限らず、ドイツだけでもありません。これはヨーロッパ諸国の自然科学全般に言えることです。その原因のひとつは、人文科学や社会科学が対象とする文化はそれを担う民族の歴史的、社会的条件によって異なっており、そのことはそれぞれの国語とも密接な関係にあるのですが、自然科学が対象とする物質は客観的な存在であり、普遍的なので、その学問もさまざまな国に共通な体系があり、そのためその用語も同じであった方がいいからです。ふたつめは、近世に至るまでヨーロッパは精神的にはキリスト教の世界であり、また、世俗的な世界の支配者である王侯貴族は密接な親戚関係にあって、ヨーロッパはひとつのまとまった世界を形成していましたし、学術的、文化的にも各国は自らを古典ギリシアやローマの後継者と考えてきたからです。更には、そもそもヨーロッパ諸国の言語はギリシア語やラテン語を含めてインドヨーロッパ語族という名で括ることのできる、お互いに近い系統発生関係にある言葉ですから、少々発音や語形が変わっていても共通する語彙がもともと多いのです。

それでは今回は自然科学の分野の中でも化学の用語を見てみましょう。ドイツは医学とやらんで化学の分野でも他国をリードしていましたから、ドイツ語から日本語に入った化学用語も少なからずあります。

核燃料の原料になるウランは元素名ですが、これはドイツの科学者クラプロート (M. H. Klaproth 1743-1817) が発見し、その 8 年前に同じくドイツの天文学者ヘルシェル (F. W. Herschel 1738-1822) が発見した天王星 (Uranus) にちなんで名付けたものです。また、天王星はギリシア神話の天の神ウラノス (Uranos) から、さらにウラノスはギリシャ語の「天」を意味する普通名詞から来ています。英語は uranium です。次に、肌の潤いを保持するので最近女性の間で流行のコラーゲンもドイツ語です。ドイツ語では Kollagen と表記しますが、これは「膠」を意味するギリシア語の colla と「…を生ずるもの」、「…から生じたもの」を意味する接尾辞 gen から作られています。英語は collagen です。

ここで少し変わった例を見てみましょう。ワセリンは石油を精製して得られ、軟膏などの材料になる物質ですが、実はアメリカの商品名です。これはチーズブロウ (R.A. Chesebrough) が 1872 年にドイツ語の水を意味する Wasser (ヴァッサー) と油を意味するギリシア語の elaion から作った語です。アメリカの商品なのにドイツ語を使っているところがこの時代のドイツ化学の権威をうかがわせます。日本では現在でも薬の名前はドイツ語風になっていますね。ワセリンはドイツ語では Vaseline[e] と表記し、発音はヴァゼリンです。これも本来は Wasselin[e] となるところでしょうが、[v] の音を表すのに英語と共通の v を使ったものと思われる。(ドイツ語の v は本来は [f] の音を表します。)

この他にもアスピリン (これも本来は商品名です)、アクリル、ウレタン、カフェイン、ゲン「遺伝子」、ナフタリン、プロパン、ペーハー「水素イオン指数」などがあります。

身の回りのドイツ語 (5) リート、カノン、ワルツ

ドイツ語というとドイツの国語というふうに思いがちですが、ドイツ語はドイツに限りません。ドイツ語を国語とする国は他にもオーストリアとスイスがあります。スイスはドイツ語の他にもフランス語、イタリア語、レトロマン語を国語としていますが、総人口の3分の2の人はドイツ語が母語です。

本来ヨーロッパはひとつの世界であり、近世のドイツは神聖ローマ帝国と呼ばれ、日本の江戸時代の藩にあたるような多数の小国の連合体でした。その中にホーエンツォレルン家のプロイセン、ハプスブルク家のオーストリア、そのハプスブルク家の属州であったスイス、ヴェッティーン家のザクセン、ヴッテルスバッハ家のバイエルンなどがあつたのです。そして 18、19 世紀、ヨーロッパの中で近代的な中央集権的国民国家を作る機運が生まれたとき、スイスははやばやと独立しましたが、ドイツはハプスブルク家を戴く国とするかプロイセンを盟主とするかで意見が分かれましました。しかし、結局プロイセンがハプスブルク家のオーストリアを排除する形で 1871 年にドイツを統一し、ドイツ帝国が生まれましました。

私たちはクラシック音楽というとドイツというイメージがあります。ベートーベンもドイツのボン生まれですが、主にオーストリアのウィーンで活動し、シューベルト、シュトラウスなどがオーストリアの人であることを思い出すと、18、19 世紀はまだドイツとオーストリアが文化的にもひとつであったことが頷けると思います。また、ドイツ人のヘンデルはイタリアやイギリスで活躍し、オーストリア人のモーツァルトはフランス、イタリア、イギリス各地を演奏旅行して回り、イタリア語でオペラを書いたことを思い出すと、やはりヨーロッパは文化的にひとつであったことがわかるでしょう。

それではドイツ語から日本語に入った音楽用語を見てみましょう。まずリートですが、ドイツ語では Lied と書き、発音はリートです。文字に引きずられてリードと言うのを耳にすることがありますが、ドイツ語を習ったことがある人は、語末の d は t と同じように発音することを知っているでしょう。この語はドイツ語ではふつうに「歌」という意味ですが、日本語ではシューベルトやブラームスなどの作曲した「ドイツ歌曲」という意味で使われています。カノンという語も聞いたことがあると思います。これは、バッハの曲などによく見られる、第 1 声部の旋律を第 2、第 3 声部などで反復しつつ追いかけていく楽曲の形式です。ドイツ語では Kanon ですが、英語では canon で、発音はキャンノンです。ワルツはもちろん J. シュトラウス親子などのウイナーワルツで有名な 3 拍子の舞踏曲の形式ですね。ドイツ語は Walz と表記し、発音はヴァルツです。英語は waltz で、ウォールツと発音します。もうひとつスイスなどのアルプス地方のドイツ語からの外来語をあげるとすればヨーデル (Jodel) でしょう。これは裏声を使った独特の歌い方で有名です。

この他にもホルン、メトロノーム、タクト、セレナーデ、コラール、フィルハーモニーなど沢山あります。少しでも音楽に詳しい人ならすぐにもいくつも見つかると思います。

身の回りのドイツ語 (6) ザイル、ピッケル、リュックサック

イタリアからフランス、ドイツ、スイスをへてオーストリアまで連なるアルプスはヨーロッパの屋根ともいうべき山岳地帯です。アルプスにはモンブラン、ユングフラウ、マッターホルンなどの 4000 メートル級の有名な山があります。ですからここで登山やスキーなどのスポーツが盛んになったのも決して不思議ではないと言えます。

このアルプスという語ですが、これは英語の(the) Alps から来ています。ドイツ語ではアルペン(die Alpen)です。英語でもドイツ語でもフランス語(les Alpes [レザルプ])でも複数形です。ドイツ語の形はスキーのアルペン種目という語に見られます。

明治以降、日本でもヨーロッパをお手本にして登山やスキーが行われるようになりました。日本の山にも北アルプスや南アルプスなどの呼称がつけられたほどですから、スイスやオーストリアのドイツ語から入ってきた登山やスキーの用語がたくさんあります。

まず登山用語ですが、よく知られたものとしてはザイル、ピッケル、ハーケンなどの登山道具を表す語があります。これらのドイツ語は Seil, Pickel, Haken です。また、ヒュッテはドイツ語では Hütte で、「小屋」一般を表しますが、日本語は「山小屋」の意味で使われています。同様に、ヤッケはドイツ語では Jacke で、「上着」一般ですが、日本語は「ウインドヤッケ」の意味です。リュックサックはドイツ語では Rucksack ですから、本来のドイツ語の発音はルックザックです。シュラーフは Schlafsack「寝袋」の省略です。

他に、山岳地帯の状態を表す語で、グレッツチャーは Gletscher で「氷河」、アイスバーンは Eisbahn で「凍った道」を意味します。また、フェーン現象のフェーンはドイツ語では Föhn で、アルプスを越えて吹いてくる熱くて乾燥した南風のことです。

スキーは明治 44 年にオーストリアの武官レルヒ(Theodor von Lerch)によって日本に初めて伝えられました。スキーという語そのものはノルウェー語です。ドイツ語では Ski と書いて[シー]と発音します。Ski は道具であるスキー板も意味します。スキーの杖であるストックもドイツ語の Stock です。また、スキー靴をスキー板に留めるビンディングですが、これは binden「結びつける」という動詞が名詞化されたもので、ドイツ語では Bindung となります。ビンディング(Binding)となっているのは英語との混同だと思われる。英語であればバインディングとならなくてはなりません。さらに、スキーをする場所がゲレンデですが、これはドイツ語では Gelände で、一定の広さの「地所」を言います。

また、スキーの技術を表す語も残っています。ボーゲン Stemmboogen の省略で、stemmen は「突っ張る」こと、Bogen は「円弧」を意味します。つまり、ブレーキをかけながら、円弧を描いて滑り降りていく技術です。プルークは全制動をかけて降りていくことですが、ドイツ語は Pflug で、「鋤」という意味です。これは人が牛に引かせた鋤を押していく姿に似ているからです。また、スキーで滑った後に雪の上に残る跡はシュプールですが、ドイツ語は Spur で、「痕跡」一般を意味します。シュプールは今日でもいろいろと比喩的な、ときに、ロマンティックな意味で使われていて日本人の好きな語のようです。

身の回りのドイツ語 (7) カテゴリー、ヒエラルヒー、メルクマール

明治以降、私たちの先人は近代的な国民国家を建設するために、憲法、軍隊、医学、化学などの実際的な制度や知識をドイツからたくさん取り入れました。しかし、それに限らず、音楽などの芸術と並んで、ゲーテやシラーなどの文学、カント、ヘーゲル、ニーチェなどの哲学思想、マルクスやマックス・ウエーバーなどの社会科学などから、自然科学や技術を生み出すもととなっている、人間や社会をもきちんと研究してきました。

物事はさまざまにグループ分けすることができます。例えば、人間であれば性によって男と女に、年齢によって大人と子供に、国籍によって日本人とドイツ人に、などのように分類されます。このそれぞれのグループがカテゴリーというわけです。英語では category ですね。これも本来はギリシア語です。日本語では範疇という難しい漢語をあてています。このカテゴリーは階層関係をなしています。例えば、人間は犬などと並んで動物の下位概念であり、動物は植物と共に生物の下位概念です。この階層関係をヒエラルヒーと言います。これも本来はギリシア語で、ドイツ語では Hierarchie、英語でも hierarchy ですから共通しています。しかし、英語はハイアラーキーと発音しますから、ヒエラルヒーという語はドイツ語から入ったということがわかります。

ひとつの範疇はいくつかの意味成分の組み合わせで記述することができます。例えば、「男」という範疇は「人間」と「男性」という成分の組み合わせです。このような成分がメルクマールです。これはドイツ語では Merkmal で、merken「察知する」や「覚える」という意味の動詞と Mal「印」という意味の名詞から成り立っています。つまり物事を見分ける際の手がかりとなる特徴、指標のことです。簡単な日常語では目印です。

学問は客観世界をいろいろな視点から分類、整理し、抽象化して見せるわけですが、その整理の仕方は視点の立て方によっていろいろなものがあり得ます。例えば、「人間は動物である」もひとつの判断です。これをテーゼと言います。ドイツ語は These です。人間や社会現象に関する判断は自然科学よりも多様であり得ますが、多様とは言っても無原則ではなく、何らかの基準に基づいていますからある程度客観的です。しかし、この客観性も決して普遍的ではなく、判断者の属する社会や歴史の影響を受けています。このような社会的、歴史的制約を伴った判断をイデオロギーと言います。ドイツ語は Ideologie です。

人文・社会科学は人間や社会現象を解釈するだけにとどまりません。マルクスは社会の変革を目指す実践的社会科学を提唱しましたから、19世紀後半から20世紀前半にはさまざまな革命運動が起きました。プロレタリア (Proletarier) が自分たちの権利を主張して、隊列を組んで、シュプレッヒコール (Sprechchor) をしながら町を練り歩き、社会のヘゲモニー (Hegemonie) を握ろうとしました。このシュプレッヒコールですが、sprechen「話す」と Chor「合唱」から成り立っていて、声を合わせてスローガンを叫ぶことです。いかにもドイツ語という感じがしませんか。このように、人文・社会科学の分野からもさまざまなドイツ語が日本の社会生活の中に入り込んでいます。

身の回りのドイツ語 (8) メルヘン、マイスター、スピッツ

ドイツ語から日本語に入った外来語に表れたドイツ文化の影響はこれまで見たような学問分野に限られるわけではなく、もっと普通に日常生活の多岐な領域にも見られます。

例えば、メルヘンです。グリム兄弟のいわゆるグリム童話が有名ですね。メルヘンはドイツ語では Märchen で、発音はメールヒェンです。これは Mär「お話」という名詞に小さいものを表す接尾辞 chen がついた語です。ですから、「短いお話」という意味で、必ずしも「童話」ではありません。19 世紀、ドイツが国民国家の建設を目指していた時代にグリム兄弟もドイツ人のルーツを探るためにドイツ語の歴史を研究し、中世のドイツ語文学作品を収集しました。また、民話を採集し、それを Kinder- und Hausmärchen「子供と家庭のお話」と題して出版しました。その際、あまり残酷な部分は部分的に書き直したことも事実ですが、目的はあくまでドイツ国民の精神的共有財産とすることでした。民間に実際に伝承されてきたお話ですから中世の過酷な現実生活を反映して残酷な出来事があったのも決して不思議ではありません。また、それは曲げられない事実の違いありません。

ドイツはドイツ車に代表される工業技術とそれを支えている職人の国です。その職人の親方がマイスターです。ドイツ語では Meister で、これは英語の master にあたります。この親方と徒弟の制度も中世以来の伝統があります。例えば、ワーグナーのオペラに「ニュルンベルクのマイスタージンガー」がありますが、これは 16 世紀にニュルンベルクに実在した靴屋の親方、ハンス・ザックスのお話です。シンガーというのは英語の singer と同じで歌手のことです。中世の職人の親方たちは詩を作り、それをメロディーにのせて歌い、歌合戦をしていたのです。なかなか教養も高かったことを表しています。

次は食品の分野です。バウムクーヘンは夙に有名ですが、ドイツ語は Baumkuchen ですから、正しい発音はバウムクーヘンです。Baum は「木」、Kuchen は「ケーキ」です。この名前は木の年輪のような模様由来します。サワークラウトというのはキャベツの酢漬けです。これのドイツ語は Sauerkraut で、sauer は「酸っぱい」という意味の形容詞、Kraut は「(野菜の) 葉」の意味です。発音はザウアークラウトが本来で、サワーというのは英語の sour との混同だと思われます。また、最近ではジュースをゼリーで固めた子供のお菓子、グミを見かけますが、グミはドイツ語では Gummi で、本来は「ゴム」を意味します。ゼリーの弾力のあるところがゴムのようなのでこう呼ばれています。

ドイツ人は犬が好きですから、いろいろな犬がいます。そのせいか、日本語にも犬の種類を表すドイツ語が多く見られます。ダックスフントはドイツ語では Dachshund で、Dachs は「アナグマ」、Hund は「犬」ですから、アナグマ狩りの犬です。ドイツでは Dackel と言う方が多いようです。スピッツはドイツ語は Spitz で、正しい発音はシュピッツです。「尖った」という意味の形容詞から来ていて、実際、顔が尖っています。プードル(Pudel)、ボクサー(Boxer)、ドーベルマン(Dobermann)もドイツの犬です。最近では、シュナウザーという犬を見かけます。ドイツ語では Schnauzer ですから、本来の発音はシュナウツァーです。

身の回りのドイツ語 (9) 翻訳借用

外来語は専門的には借用語と言います。つまり、外国語の単語を借りてくるわけです。その借用の仕方にはふた通りあります。ある外国語の語をそのまま借りてきて、日本語の場合はその音をカタカナで表します。そのような語をカタカナ語と言います。例えば、英語の Computer を日本語にコンピュータという形で借用するのです。これまで見てきたドイツ語の外来語はすべてこのカタカナ語であったわけです。もうひとつの方法はある外国語の単語を翻訳して自分の国の言語の語彙とします。これを翻訳借用と言います。先の Computer の例ですと、この語の意味を翻訳して、計算機とするのです。翻訳借用の場合、日本語では多くは漢語が使われます。ただ、借用語は翻訳してしまうと外来語であることがわからなくなってしまいます。しかし、よく考えてみると、私たちが普段何気なく使っている電話、自動車、鉄道、飛行機などは本来は日本にはなく、ヨーロッパから導入されたものですから、これらを表す語も外来語であったことに思い当たります。それでは今回はそのような翻訳借用語を見てみましょう。

私たちが初めてドイツ語を習うと、盲腸は Blinddarm、十二指腸は Zwölffingerdarm、酸素は Sauerstoff、窒素は Stickstoff と言うことを知ります。これらの単語をよく見てみると、blind は「盲目の」、Darm は「腸」、zwölf は「12」、Finger は「指」という意味ですから、盲腸も十二指腸もまさに直訳です。また、酸素も窒素もまったく同じで、Sauer は「酸っぱい」、Stoff は「素材」という意味ですし、Stick は sticken「窒息する」という動詞の語幹です。それでは盲腸や酸素などの語はドイツ語からの翻訳借用語かと言うと残念ながらそうではありません。このシリーズの第2回で医学用語を見たときにそれらは最初はオランダ語から入ってきました。実はこれらの翻訳借用語もオランダ語から入ってきたものです。しかし、杉田玄白、前野良沢らが翻訳した『解体新書』はもとはドイツ語で書かれたものであったこと、ドイツ語とオランダ語は非常によく似た言語で、ほとんど大差はないこと、また、第4回に見たように、特に自然科学の分野では、新しい概念はギリシア語やラテン語を使って造語して、ヨーロッパ全体に通用するようにし、共通の学問世界を形成してきたこと、などを考え合わせると何語からの翻訳借用かという問いはヨーロッパに関してはあまり大きな意味を持たないとも言えます。

ただ、ある個人が提唱し、その人の理論全体と密接に関わっている独特の用語のようなものは何語からの翻訳借用なのかが明確です。例えば、aufheben という語は正、反、合と進む弁証法的発展において、合の段階に至ることを意味するヘーゲルの用語です。これは止揚と翻訳されていますが、ドイツ語は「上にあげる」、「とっておく」などの日常的によく使われるまったく普通の語です。また、Übermensch はニーチェの造語ですが、日本語では超人と翻訳されています。これは理想的人間典型のことを表しています。最後に、ワグナーはテキストと音楽と舞台の総合芸術を提唱して、これを Musikdrama と名付けたのですが、これは楽劇と翻訳されています。

身の回りのドイツ語（10）華氏、ツェペリン、ベンツ

これまでドイツ語から日本語に入った外来語を見てきたわけですが、それらは普通名詞でした。他方、ドイツには優れた学者や発明家などがたくさんいて、彼らが発見したり、発明した物や概念にはしばしば彼らの名前が付けられています。今回はそのような固有名詞がついた語を見てみましょう。

温度を測る単位には摂氏と華氏があります。摂氏はこれを創案したスウェーデンの天文学者セルシウス (Anders Celsius 1701-1744) のことですが、セルシウスを中国語で表記すると摂雨修斯となるからです。氏は「さん」という意味です。他方、華氏ですが、これはドイツの物理学者、ファレンハイト (Gabriel Daniel Fahrenheit 1686-1736) のことです。ファレンハイトの中国語表記は華倫海です。氏を付けるのは礼儀正しくて、いかにも時代を感じさせますが、ワイル氏病などは今日では単にワイル病と言うようになりました。これもドイツ人医師、ワイル (Adolf Weil 1848-1916) が最初に報告した病気であることに因ります。同じ医学用語でしたら、ワッセルマン反応があります。これはドイツ人細菌学者、ワッセルマン (August Paul von Wassermann 1866-1925) が考案した梅毒の診断法です。また、最近、日本社会の老齢化とともに問題になっているアルツハイマー病があります。これはドイツの神経病学者、アルツハイマー (Alois Alzheimer 1864-1915) が初めて報告しました。

中学校の理科の実験などで、ブンゼン灯というガスバーナーを使うことがあります。これはドイツの化学者、ブンゼン (Robert Wilhelm Bunsen 1811-1899) が発明したものです。ブンゼンはルビジウム、セシウムなどの元素も発見しました。日本ではツェペリンという飛行船の代名詞になっていますが、これはツェペリン (Ferdinand von Zeppelin 1838-1917) というドイツの軍人が建造したもので、1928年に日本にも来たことがあります。考古学の好きな人でしたらナウマン象のことはご存じでしょう。これは明治政府の招きで1875年に来日し、東京大学で地質学を教えていたドイツ人の学者、ナウマン (Edmund Naumann 1854-1927) が日本で発見した化石です。

ポルシェやベンツはドイツ車の代名詞になっていますが、ポルシェもベンツも設計者の名前です。ポルシェ (Ferdinand Porsche 1875-1951) はフォルクスワーゲン社のカブトムシ (ドイツ語では Käfer) を設計したことで有名です。ベンツ (Carl Friedrich Benz 1844-1929) はダイムラー (Gottlieb Daimler 1834-1900) とともにダイムラー・ベンツ社を設立しました。ダイムラー・ベンツ社の車が Mercedes-Benz です。これを日本ではベンツと言いますが、ドイツではメルツェーデスと呼んでいます。

私たちが毎日のように見ているテレビのブラウン管はドイツの物理学者、ブラウン (Karl Ferdinand Braun 1850-1918) が考案したものです。また、電波の振動数などの単位であるヘルツはドイツの物理学者、ヘルツ (Heinrich Rudolph Hertz 1857-1894) に、超音速を表すマッハはオーストリアの物理学者、マッハ (Ernst Mach 1838-1916) に因みます。

このように見てくると自然科学分野におけるドイツのプレゼンスが感じられますね。

身の回りのドイツ語 (11) BMW、ライカ、プーマ

ドイツには優秀な学者、発明家、技術者だけでなく、優れた製品を作っているたくさんの企業があります。そのような企業の名前はしばしばその製品の代名詞になっていることがあります。

BMW や VW はこれらの車を生産した会社の名前です。BMW は日本でもよく知られた車ですが、これは Bayerische Motorenwerke の省略で、「バイエルン・エンジン製作所」という意味の会社名です。BMW は日本では英語読みをして、ビー・エム・ダブリューと言っていますが、ドイツ語のアルファベットを習った人ならベー・エム・ヴェーと正しく発音できるでしょう。また、日本でフォルクスワーゲン、省略して、ワーゲンと言っている車は Volkswagenwerk「フォルクス・ヴァーゲン社」の生産する車です。Volk は、英語の folk と同じく、「民族、国民」という意味で、発音はフォルク、Wagen は「車」という意味で、発音はヴァーゲンですから、Volkswagen、フォルクス・ヴァーゲンは本来「国民車」という意味です。Käfer「カブトムシ」に代表されるような廉価で丈夫で経済的な車を生産することを目的とするところから来ています。Volkswagen を省略すると VW となりますが、これを縦に組み合わせたものがマークになっています。そしてドイツでは VW はファオ・ヴェーと読んで、Volkswagen 社の車を指します。

ライカやツァイスはドイツのカメラの代名詞になっています。ライカ (Leica) はライツ (Ernst Leitz 1843-1920) の設立したライツ社のカメラという意味で名付けられた商標です。また、ツァイスはカール・ツァイス (Carl Zeiß 1816-1888) が創設した、顕微鏡などの精密光学器械で有名なカール・ツァイス社の作ったカメラのことです。製品はコンタックスという名前ですが、ツァイス社のカメラという意味でツァイスと言っています。

スタインウェーのピアノも世界的に有名で、ピアノの代名詞になっています。これはアメリカに移住したドイツ人、シュタインヴェーク (Heinrich Engelhard Steinweg 1797-1871) がニューヨークに設立したピアノ製造会社の製品です。設立者の Steinweg は、自分の姓の Stein は「石」、Weg は「道」という意味ですので、これの Weg だけを英語に翻訳して Steinway としたわけです。アメリカに移住したドイツ人はアメリカに同化するという意味で自分の姓を英語に翻訳することがしばしばありました。Schneider は普通名詞としては「仕立屋」という意味ですから、英語の Taylor に、Schmidt は本来 Schmied「鍛冶屋」という意味ですから、英語の Smith に翻訳するといった具合です。

最近では世界中でアディダス (Adidas)、プーマ (Puma) などのドイツのスポーツ用品メーカーの製品、特にスポーツ・シューズがよく見られます。アディダスはアードルフ・ダスラー (Adolf Dassler 1900-1978) が設立した会社ですが、プーマは兄弟の Rudolf Dassler が分かれて作ったものです。その商標はヒョウのような動物で、これは英語の puma に相当します。しかし、プーマがドイツの会社であるのはその発音からわかります。英語であればピューマと発音するはずだからです。

身の回りのドイツ語 (12) ハンバーグ、ホルスタイン、オーデコロン

世界の各地にはその地方の特産品があって、そこを訪れる楽しみの一つになっています。今回はドイツ、オーストリア、スイスの地名がついた語を見てみましょう。

子供たちが大好きな食べ物にハンバーグやソーセージがあります。ハンバーグはハンバーグ・ステーキの省略です。また、ハンバーガーという形もあって、これはハンバーガー・ステーキの省略です。いずれにせよ挽肉のステーキです。典型的なアメリカ料理ですが、アメリカのドイツ移民が広めたとか、北ドイツの港町、ハンブルク (Hamburg) 名物のタルタル・ステーキの系統を引くことからそう呼ばれた、などの説があります。しかし、ここでの私たちの関心はハンバーグやハンバーガーという形です。まず、ハンバーグは都市名、ハンブルク Hamburg の英語読みであることはすぐ察しがつくことと思います。次に、ハンバーガーですが、これは「ハンブルクの」という形容詞 Hamburger の英語読みです。つまり、日本語のハンバーグは「ハンブルクのステーキ」という意味なのですね。ちなみに、ドイツ語では Deutsches Beefsteak 「ドイツのビフテキ」と言います。

ソーセージは英語の sausage から来ています。ドイツ語では Wurst と言います。日本ではウィンナーやフランクフルトがよく見られますが、ウィンナーは先ほどのハンバーガーと同じように、「ウィーンの」という形容詞です。つまり、ウィンナーは Wiener Wurst 「ウィーンのソーセージ」の省略です。ただ、Wiener の発音はヴィーナーです。これからすると、フランクフルトはドイツ語では Frankfurter Wurst です。これを省略するならフランクフルターの方が正しかったわけです。

ホルスタインは牛の種類で、白と黒の斑の牛ですが、これは北ドイツの地方名 Holstein から来ています。ドイツ語の発音はホルシュタインです。また、セント・バーナードは雪の中で遭難した人を救助するので有名な犬の種類です。これはスイスとイタリアの国境の大サン・ベルナル (Grand Saint Bernard) 峠 (西の方に小…もある) にある修道院、救護施設でこの犬を飼っていたことに因ります。この地名はこの修道院を建てたとされる聖者ベルナル (Saint Bernard) から来ています。これを英語読みにするとセント・バーナードになります。ですから、サン・ベルナルはスイス・フランス語圏の言い方で、厳密に言うとドイツ語ではありません。ただ、ドイツ語の言い方もあって、聖者名、地名は Sankt Bernhard、ザンクト・ベルンハルト、犬は Bernhardiner、ベルンハルディーナーです。

化粧水のオーデコロンはフランス語の eau de Cologne、オー・ド・コロニューから来ています。これは「ケルンの水」という意味です。ドイツ語では Kölnisch Wasser と言います。18 世紀中頃、ケルンにいたイタリア人が創出し、フランス語とドイツ語でこう名づけたことによります。ライン河畔のケルンは大聖堂で有名ですが、中世からここに大司教座がありましたから、ヨーロッパ・キリスト教世界でも第一の国際都市でしたし、また、フランスやイタリアの文化的影響の強かった所です。また、18 世紀末から 19 世紀初頭にはナポレオンによって占領され、フランスに併合されたこともあります。